

「当たり前だし、そんなこと、知っている」と思っていた「ユマニチュード」

修士1年 田中知世子

認知症の高齢者と顔がくっつくのではないかと思えるくらい顔を寄せて話しかけるサロペット姿のフランス人男性がテレビで放送されていた。

「ユマニチュード」。「触れる、話しかける、見つめる、寝かせきりにしない。」  
私は、「そりゃそうよ。当たり前だし、知っているよ。みんな。」  
そう思って見ていた。

しかし、昨日、イヴ・ジネスト氏の講義を聞いて胸が締め付けられた。

スクリーンの、画面を隠して流された奇声、叫び。

「何だと思えますか？」 その質問に、私は、すぐわかった。

介護拒否する高齢者と介護・看護するものとの声だと。

何度も何度も聞いてきた声であるからだ。

胸が締め付けられ、泣いてしまいそうだった。

それから先の講義は、「ユマニチュード」を知りたい、理解したい、と引き込まれていった。私の感情が動いた。

「ユマニチュード」に、ジネスト氏の言葉と視線に、くぎ付けになった。

ジネスト氏は、40年の間に3万人の、ケアに困難な人たちに会ってケアしてこられた。最悪な人、困難な人ってどんな人？ 体重がとても重いのか？ 衰弱しているのか？

ジネスト氏は、ナースが、1日10回以上「じっとして！動かないで！」と言うのに気づいた。

体育学の教師であるジネスト氏は「動かないことは、死んでいること」と知っていただけに、抑制をし、ベッドでシャワーをすることに疑問を感じられた。

シャワー室で立ってしたほうが、ナースも高齢者もお互いに楽なのに。

監獄でもしない抑制を病院でする。

犬ですらない抑制を人間に行う。

人間は縛られ続けて生きることができない。

そのようなことは当然であったはずなのに、病院や施設では逆のことが行われている。

ベッドで寝かせ続けることは、「ベッドで死ぬこと、死なせてしまうこと」だ。

人間は1日に20分立って歩けたら寝たきりにならない。

シャワーは20分ほどかかるのではないか。1日20分の関わり、介護保険上での看護ケアであれば、ほぼ最小単位である。介護でもほぼ最小単位。関われないことはない。

もう一つ、「第二の誕生」について話された。一つ目の誕生は母の体からこの世に出るとき、そして二つ目は、社会的誕生であるという。動物なら、舐める行為であるという。親と同じ種に属することを、子に理解させる。目と目を合わせ触れること、「あなたは人間なんだ」「仲間だ」と教える。やわらかい声で、言葉をかけながらゆっくりと手を大きく広げ支え触れる。

相手がどのような状態であったとしても「あなたは人間」とつたえる。そして、我々は、「第二の誕生」の助産師なのだ。「人間は愛を受け取るように生まれている」ことを忘れていた。思い出さなければならない。講義を聞き終わった後、私は、受け取る愛を忘れていた自分に気づかされた。閉ざされた自分の心がジネスト氏の言葉で開かれたように思えた。認知症高齢者や困難高齢者といわれる人と同じように、私は、「ユマニチュード」に、感情を動かされたのである。

講義後、「放課後」の居酒屋に場所を移したとき、ジネスト氏はワークをしようと言われた。隣の人と20センチくらいの近さで相手の瞳に自分が映る近さで相手を見つめる。私とペアになった方は、何度も会ってはいたけれど、ご挨拶だけの方だった。はじめは気恥ずかしさがあったが、懇親会が終わり、外へ出たとき、語らずとも近づいたように思えた。互いに認め合うこととは、そういうことなのだと思えた。

テレビで見たときには、「寝かせきりにしないこと、見つめること、話すこと・触れること、そんなこと、当たり前」と思った「ユマニチュード」であった。そう思ったのは、テクニックに傾いていた自分だった。今更ながら哲学の必要性に気付かされた。相手と20センチの近さで見つめ合い、20分大きな手のひらで支え、触れて、話し、第2の誕生を祝う心があれば看護や介護は大きく変わると思う。

ジネスト氏の最後の言葉、「日本人は変わるときは一気に変わる」に、希望を感じ、信じたいと心より思う。

